

プラトーン、『パイドロス』243D6 *ék τὸν ὁμόλογον* κτλ

津上英輔

241D2から243E8までの箇所(以下第二インテルメツォと言う)は、ソークラテースの第一演説を清算し第二演説を準備する地の部分として、演説を作品全体の中に文脈つけるばかりでなく、議論の方向を恋の非難から讚美へと正反対に向け変えるという、いわば要の役をも担っている。我々はこの部分ならびに、それを承けて始まるパリノーイディアの冒頭部分から、第一演説を置いたプラトーンの真意の一端を知らされ、同時にそれとの関係で、全篇の核心部分たる第二演説の枠組と展開を予告されるのである。そこでまずリュシアースの演説が終ってからここに至るまでの話の運びをごく大まかに振り返っておかなければならない。

234C6から237A5までを第一インテルメツォとする。リュシアースの演説はソークラテースの目には、その措辞の面、修辭の点でのみ優れている(234E7-235A2)が、言うべきことを言っておらず(234E5-6)、「同じ議論の繰り返しにすぎない(235A3-8)」。そこでソークラテースは自らそれに劣らぬ演説を語りうることをほめかす(235C5-6)が、彼は単刀直入に話を始めせずに、故意にそれを遅らせているように見える。その意図は次の二点に要約されると思われる。第一に、次の演説は自らすすんで語るのではなく、パイドロスに無理強いされて気が進まぬながらするのだ、という体裁を繕うこと。これはパイドロスによる暫い(236D10-E3)の前後の一節に、何よりも明らかに見て取られる。自分の演説が自らの案出によるもので

はないとする行(235C6-D3)も、単にソークラテース一流のエイローネイアーとしては片づけられないかも知れないし、羞恥のあまり顔を覆って話すという発言(237A4-5)に至っては彼の消極性は明瞭である。では彼にとって何が本意であったのか。それは意図の第二点にかかわってくる。

ソークラテースは演説を始めるに先立って、ひとつの限定を加えている。これからの話がヘウレシスではなくディアテシスの点のみ、リュシアースを凌ぐことを意図しているという限定である(235E2-236A6)。この両概念の内包の吟味は別箇の注釈に俟つとして、ここでは次の点を確認すればよい。ソークラテースは「自分を恋している者より、そうでない者に身を任せるべきである」という命題そのものを自らの意志で選び取ったのではなく、ある所与の命題を証明するしかたについて、ひとつのよりよい例を提示しようとしているにすぎないのである。つまり彼が演説で示したいのは「何を」ではなく、「いかに」なのである。するとその証明に対して、「恋する者は恋していない者より病んでいる」(236A8-B1)ことが必然的前提として要請される。したがってここから帰結されるのは、ソークラテースが命題そのものとそれに対する前提とに責任を負っていないということである。第一点として見た彼の消極性はこの点に由来すると考えられる。事実逆の命題を語る第二演説では、彼は顔の覆いを取っている(243B6)。なおやや先回りして言えばこの前提は、パリノイディアードで第一演説の命題が正される際、誤った帰結を導いた原因として指摘され(後述のQ)、それを反証する形で第二演説が進められる。ただしここではパリノイディアードにおけるように、「狂気は悪である」と明確に定式化されてはおらず、恋する者の「愚かしさ」、「病の状態」だけが言われていて、その定式に至るには今後の議論の展開を俟たなければならない。

第二インテルメッツォになってソークラテースは、今の演説がパイドロスに強制されたのであって、自分には責任がないことを繰り返し強調し(238D5, 242A1-2, *ibid.* 7-8, *ibid.* D4-5, *ibid.* D11-E1)。

ついにパリーノイディアーでは、第一演説がパイドロスのもとまで言い切るに至る(243E9-244A2)。彼がそうまでして前言を撤回する理由は主として、神であるエロースを非難した不敬度にある(242E2-4)。そこで取り消しの必要が生じ、エロースにパリーノイディアーを奉げることになる。しかし彼は、ヘレネーを非難して一旦盲目にされた後に、はじめて前言を取り消したステーションコスらより賢く、神の咎めをそもそも受けぬまま第一の議論を撤回しようとする(243B3-6)。つまりステーションコスはかつて自らの語った内容を真向から否定し、そのことによってかえって、かつて失言をしたという事実そのものを追認したことになるわけであるが、ソークラテースはそもそも第一の演説を語ったのは自分ではないとすることで、一切の神罰を回避しようというのである。神罰に相当するか否かという文脈で演説の帰属を問う場合、問題になるのは言うまでもなく「いかに」ではなく「何を」語るかである。そしてこの点はすでに見たように、第一インテルメツォの意図の第一、第二としてすでに確保されていた。こうしてどんでん返しはものの見事に行なわれた。

しかし、それでは第一演説とは何だったのか。はるかに下って主題化されるレトリック問題への伏線という意味もあるが、ここで直接的に重要なのは、この演説の命題とその前提である。二つの演説はその命題が正反対に対立しあっている。ソークラテース(プラトーン)の真意が第二のほうの命題にあるのは言うまでもない。ではその対立はいかに生じるのか。パリーノイディアーのはじめに(244A3-8)語られるところを要すると、次のような図式にまとめられる。

〈第一演説〉

P₁ 恋する者は狂気、恋していない者は正気
しかるに

Q₁ 狂気は悪（これはすでに第一インテルメッツォで、未分化ながら前提として確保されていた（235ff. 1

236B1）

ゆえに

C₁ 恋する者にでなく恋しない者に身を任せるべし

〈第二演説〉

P₂ 恋する者は狂気、恋していない者は正気
しかるに

Q₂ 狂気から最大の善が生じる

ゆえに

C₂ 恋しない者にはなく恋する者に身を任せるべし

このうち C₂ は *Agrippa's* によって示唆され、P₂ はその文脈で非明言的に了解されていると考えられる。これを見てわかるとおり、第一の前提は両方の演説に共通である。つまり第一演説では明確には主題化されぬまま了解されていた第二の前提を吟味・反証することを通じて、同じ前提（P₁、P₂）から全く逆の帰結を導き出すのがこの第二演説のねらいなのである。こうなるもはや、第二演説との関係で第一演説の有していた意義は明らかであろう。つまり誤まった結論への推論の必然性によって、ことさらに強く前提の誤謬を印象づけ、第二演説の焦点を明確にしているわけである。

さてようやく本題に入って、問題の箇所をいかに解すべきか。まず直接、間接に私が知りえたかぎりで、これまでの注釈者の解釈を追ってみると、「恋する者よりむしろ恋していない者に身を任すべきだ、と主張したのと同じように」とする Ast (1829) の説は、Stalbaum (1857) の指摘のとおり、句の位置の落ち着きが悪く、語法上問題外として、残りの説は次の二つにまとめられる。A 「他の点が同じなら」Heindorf (1802) ; Stalbaum (1857) ; Thompson (1868) ; L. S. J (1940) ; Robin (1947) ; Hackforth (1952) ; 藤沢 (1957) B 「相等しく、つまり愛してくれることに応えるために」Fraenke (1950) ; Verdenius (1955) ; De Vries (1969) それぞれ語法上は充分根拠があるが、この文脈ではどうか。A を採ると、この限定は、たとえば相手が金持ちや賢人であれば、愛してくれていなくても身を任せるべきことを主張する可能性を留保するもの、ということになるが、これからソークラテースが否定しようとしているものは、まさにそうした日常的利益に他ならず、どうしても唐突の感を免れない。B の場合に問題となるのは、これまでのところ愛人が与える恩恵のことは語られておらず、それは演説が先に進むうちによく見えはじめるにすぎないということであろう。それに至る伏線もこの近辺には見当たらない。もちろんどちらも決定的難点ではない。

そこで、『パイドロス』演習の中で討論で、 $\epsilon\kappa$ を前提の意味で取ってはどうか、という趣旨の一色裕の発言に着想を得て私が提出した解釈は、 $\epsilon\kappa$ を迂言的副詞を形成する用法と見、 $\epsilon\kappa$ τὸν ὄψομαι = ὄψομαι 「同様に」と読み替えた上で、その文脈中の意味を「同じ理由で」、「同じ前提(さきほどの P₁ || P₂ に基づいて」と敷衍するものである。この前後の箇所ではソークラテースは、常に第一演説を念頭においているし、さきほど見たように、この直後でこの一句にまさに対応する説明がなされている。また「リュシアースにも忠告する」(243D5) と言うのは、自分はパリノーイディアを奉げることで耳を清めるが、それと同じことを彼に勧めるといふ意味であろう。その場合前言を否定するのに最も巧妙なしかたは、ソークラテースの採った方法、つまり三段論法の

二つの前提のうち、一方を温存したまま他方をつき崩すことによって、逆の結論を得るという方法なのであった。

九〇

(一九八五年五月七日)